

視点

子どもの関心に関心を向ける



帝京大学教育学部
初等教育学科子ども教育コース 講師
利根川 彰 博

幼稚園の暮らしの中で、子どもたちは日々、身の回りの何かに出会い、不思議さや美しさを感じ、そこから思考を深めていくという様子があちこちに見られます。クラス担任として長らく子どもと共に暮らしてきた私の耳は、幾つかの「キーワード」を反射的にキャッチしてしまうようになっています。その一つが「なんで〇〇なんだろう？」という言葉です。

9月初旬。台風が過ぎた後の園庭に、まだ実を落とすには早いドングリがたくさん落ちていました。年長組の女の子2人がその様子に出会い、「なんで、こんなにドングリが落ちてるんだろう？」と、つぶやきました。昨日までの風景との違いを感じてのことでしょう。

「なんで〇〇なんだろう？」という言葉は、その子どもがすでに「何か」に出会い、心を動かし、思考が始まっていることを示しています。その場に立ち会っていると、「さあ、ここからどんなことが展開していくのだろう？」と、ワクワクせずにはいられません。これが「子どもの関心に関心を向ける」という態度ですが、それが実感されるまでには時間がかかりました。

私が年長組を担当していたある年、クラスの子もたちにこう宣言しました。「先生はね、みんながどんなことに『これ、おもしろい！不思議！なんだろう？』『こんなの発見した！』って思っているのか、知りたくてたまらないんだ。だから、おもしろいことを発見したら、先生に教えてね」と。

もちろん、態度からもそうしたことは伝わっていくでしょうが、よりはっきりと宣言することで、「なるほど。先生はそういうことが好きなんだ」と納得するようです。逆に言えば、そう宣言したからには、

私にとって「それって、本当におもしろいの？」と感じてしまうことにも、関心を示さなければウソになってしまう。

ところが、子どもの発見してくるものの半分は、私にとって「つまらないな」と感じるモノでした。子どもたちは「思考」が始まる前の「出会い」を報告してくれるのですが、その段階では意味が分からず、「つまらない」と感じるものが少なくなかったのです。

しかし、報告してくれる子どもたちは本当に心が動いていて、とてもいい表情です。そこから、「なんで、こんな発見がおもしろいんだろう？」と、私の思考がはじまりました。

そして、発見したという対象がつまらないと感じられるモノでも、それを発見した子どもの心の動きはおもしろい、と次第に実感されてきます。するとどうしたことでしょう。はじめは「つまらないモノ」に見えていたものが、だんだんと魅力的に感じられてきます。こうなってくると、意識的に「子どもの関心に関心を向けよう」と考える前に、反射的に「つい、関心が向いてしまっている」という姿勢になっていくのです。すると、それが他の子どもたちの関心を引き寄せることにもつながっていき、やがて私たちは「発見の共同体」となっていくのです。

「幼児期の学び」を支える重要な点は、大人のこうした「子どもの関心に関心を向ける」態度であろうと思われます。もちろん、子どもたちにとって「心を動かす出会い」が生まれる環境を整えることも重要です。

その先にどんな実践が展開されるのかは、拙著『好奇心が育む学びの世界』（風鳴舎）をご覧くださいと幸いです。